ふるさとを語る

兵庫県は、５つの国で成り立っており、多彩な人材を輩出しています。そこで、毎回、様々な分野で活躍中の方に「ふるさとひょうご」を語っていただいています。

今回は、11月6日㈫に東京會舘で開催予定の「総会交流会」において、歌声を披露していただく歌手の菅原洋一さんに、榎本県人会事務局長がお話を伺いました。

菅原 洋一
（すがわら　よういち）

加古川市出身　昭和8年生
国立音楽大学声楽専攻科卒業
昭和33年　タンゴ歌手としてデビュー
昭和42年「知りたくないの」が大ヒット
ＮＨＫ紅白歌合戦に初出場（以降22回連続出場）
平成17年～ニュークラシカルコンサートを展開

加古川のお生まれですが、一番記憶に残っておられることは何ですか。

昭和27年に加古川東高校を卒業して、歌手の仲間入りをして今年で55年目になります。「あれはどうなっているかな」、「あいつはどうしているのかな」という思いがいっぱいです。一番の思い出は、自然がいっぱいで、田んぼや畑、路地裏がある中で、かくれんぼや缶蹴り、石蹴り、鬼ごっこなど、よく外で遊んだことですね。

寺家町の商店街にあるお店がご実家ですね。お手伝いはよくされていたのですか。

加古川の中心の商店街でしたが、お店ではいつも邪魔者扱いでした（笑）

どういうきっかけか記憶がないのですが、お店で皆が休んでいる時、私が、当時ラジオで聞いた流行歌を歌ったらしいのです。そうしたら、「うまい、うまい」ってほめられて、それが嬉しくってね。

「ほめると人は育つ」ということですね。

そうですね。僕はほめられてここまできてるって感じです。

加古川東高校でも、先生や友達から「歌がうまいね」とか、文化祭で「ちょっと歌って」とか言われました？

ええ。大得意で、ギターを弾いて、歌いました。私は、普段はおとなしい子でしたが、歌う時だけは別で、存在感を出せましたね。一躍スターでした。

大学は薬学部へ進学されるご予定だったとお聞きしましたが。

父親が薬学部へ行けと言いまして。私は体が弱かったので、薬屋をやらせようと思ったのでしょう。

しかし、病気で、半年以上学校を休みまして、恥ずかしい話ですが、数学がわからなくなってね。数学が受験科目にない学校をと思って、武蔵野と国立の音楽大学を受験しました。高校３年になってからです。父親は大反対でした。

大変失礼ですが、よく合格されましたね（笑）

それなんですよ。独学ですよね。アドバイスは先生に受けたりしていましたが。高校入学後に、器楽部とコーラス部が出来ました。僕は、器楽部でトランペットを吹いていましたが、途中で辞めて、コーラス部に入ったん

です。好きな女の子がいて、一緒に歌いたいなと思って。初恋でしたね。今考えれば、自分が好きなことのためにがんばるんだな（笑）

将来は音楽で身を立てるという自信がおありだったのですか。

自信というか。声が良かった、歌がうまかったくらいです。音楽の先生に相談しましたが、「何にも知らないから受かる訳がない、とりあえず、バイエル、コールユーブンゲンをやりなさい」と勧められました。

国立音楽大学の受験ではピアノを弾くんです。僕は「乙女の祈り」を、ここまで弾けばいいだろうと2ページくらい一生懸命弾きました。声楽では、教科書に載っていたオペラのアリア、とてもきれいな曲です、それを勉強して歌いました。なんとか受験の準備をして両方受かりました。

反対されていたお父さんや先生、友達もびっくりですね。

びっくりでしょうね。運がついてるって思った。歌がうまいとほめられて、気持ちよくなって歌って、自分の存在が出てきて。自分の得意なものがこれしかないと思って、受からないと思っていた所に行けた。振り返ってみると、人生、持って生まれた運ってあるんだなと。

大学生活はいかがでしたか。

クラシックを学んでいましたので、軽音楽を勉強してはいけないと言われていました。だから、隠れてタンゴを教えてもらったり、レコードを聴いたりしていました。卒業してもすぐ就職ができないので、専攻科（今は大学院）に入り、声楽を勉強し続けました。その間にもタンゴの色々な勉強をしましたね。

僕は中学生の時からずっと、タンゴが好きで聴いていました。その当時、親戚の者から「洋一君のお母さんはもうこの世にいないんだよ」と教えられたんです。僕がお母さんと呼んでいた人が後添えの母だった。多感な頃だったから、ショックでね。その時、タンゴが流れたんです。深い悲しみに落ち込んでいる時に、バイオリンの悲しいメロディが自分の心臓の鼓動のように感じられました。音楽と自分の体の状態が一つになったんですよね。それからずっと、ただタンゴが好きで聴いていました。

大学卒業後、すぐに歌手デビューされたのですか。

大学を卒業する頃、シャンソンやタンゴなどのライブ演奏を、1杯150円で聴くことができる音楽喫茶が出来てきました。タンゴ喫茶で歌っていたところ、有名なタンゴ歌手にスカウトされ、ポリドールレコードに入りました。2年ほど、オリジナル曲を歌わせてくれたのですが、いっこうに売れなかったんです。ラストチャンスで、エンリコ・マシアスのシャンソン「恋心」を、越路吹雪さん、岸洋子さん、菅原洋一でそれぞれ歌ってみないかと言われました。そこで出会ったのが、なかにし礼さんです。A面に「恋心」を、B面に僕の好きな「知りたくないの」を入れたんですよね。そのB面が大ヒットし、紅白に出ました。それから外国に行ったり、有名なバンドと共演したり、色々なコンサートをしました。

歌手生活50周年を迎えた2008年にレコード大賞功労賞を受賞されました。今年で55年目を迎えられます。歌手菅原洋一を支えてきたものは何でしょうか。

タンゴ喫茶で歌っていた時、お客さんは3、4人と少なかったんです。けれど、聴きに来てくださる方がいること、その方々に喜んでいただけることがとても嬉しかった。聴く人に喜んでいただけること、それを絶えず思ってきたことですね。

今は、ご子息の英介さんのピアノ伴奏で「ニュークラシカルコンサート」として、ヨーロッパや日本の名曲を歌っておられます。菅原さんのライフワークとお聞きしましたが。

息子は作業療法士として働きながら、音楽家としても作曲をし、アルバムを出しています。以前、彼が勤めている病院で、僕も一緒に歌う機会がありました。参加された方が「母が菅原さんの大ファンなので聴かせたくて来たけれど、脳梗塞で話ができません」と言われました。歌い終わって、そのお母さんの傍に行ったら、「どうもありがとう」と言われたんです。娘さんも看護師さんもびっくりされていました。音楽の力かなと思いましたね。

今年9月に新アルバム「ビューティフルメモリー」を出されました。11月6日の総会交流会では菅原さんに歌っていただきます。「生涯現役」として歌っておられる姿を見て、元気づけられるのではないかと思います。

僕のコンサートにお越しいただく方は高齢者が多いです。私は来年80才になりますが、それをお話しますと、会場から「おーっ」という声が上がりますね。声は、声帯も筋肉ですから衰えるのですが、若い時の鍛え方によって違うんですね。

菅原さんから、これから社会へ出て頑張る若者達、社会の荒波で苦労されている人たちに、励ましのメッセージをお願いします。

続けることですね。それも、自分ひとりでというのではなく、みんなに支えられているからこそ、自分が好きなことを続けていけるのだということを大切にしていただきたいですね。

今日はありがとうございました。